

## 電子読書とジャパンナレッジ

### ——学術資料における「電子読書」の現状——

田中政司

まず、本日、このような機会をいただきましたことを大変光栄に存じます。ありがとうございます。

私は「ジャパンナレッジ」というデータベースを開発・運営しているネットアドバンで、マーケティング・営業を担当しています田中と申します。

今回の会議のテーマは「電子読書」だと伺っています。私が本日話をさせていただくジャパンナレッジは、アカデミックなデータベースです。調べ物や論文の作成に使う資料の読み込みも読書と捉えれば、ど真ん中ではありませんが、電子読書のひとつのジャンルと考えてもよいと思います。

ジャパンナレッジは2001年にサービスを開始し、今年で15年を迎えます。インターネットを使った種々のサービスが定着し始めた時期でしたので、日本のインターネットコンテンツサービスとしてはかなり早い時期のスタートだったと思います。ですので、インターネットが社会に定着していくなかで、コンテンツサービスがどのように受け入れられ、取り巻く環境がどのように変化していったのかを見るうえで、参加者の方々の参考になる点も多々あるのかなと考えます。

とはいえ、我々のサービスが利用される場所や端末は、一般の方々が「読書」として捉えられる環境とは少々異なっているかもしれません。使用するのは読書端末というよりもPCが主体ですし、電車の中での読書やリラックスして本を読むスタイルとはちよっと異なっています。

本日の発表ですが、ジャパンナレッジをご存じない方も多数いらっしゃると思いますので、まずは簡単にジャパンナレッジの紹介をさせていただきます。

その後、インターネットを使ったコンテンツサービスが普及してきたここ5-6年の環境や端末の変化を見ながら、アカデミックな世界での電子資料の利用環境について考察してみたいと思います。

最後に、利用環境や実態から導き出される電子読書の可能性を、我々の商品がかかわっている部分からの類推にはなりますが、あえてやってみようと思います。

それでは、まずはジャパンナレッジについて簡単に紹介させてください。

ジャパンナレッジは、事典・辞書を中心としたデータベースです。法人用と個人用のサービスが存在します。

法人サービスでは、大学図書館、高等学校図書館、公共図書館などで主に利用されています。

一方、個人サービスでは、文筆家、教職員、研究者の利用が多くなっています。サービスを開始したのは、2001年で、今年で15年を迎えます。

日本国内だけでなく、北米、欧州、東アジアなど、日本研究を行っている機関でも活発に利用されています。

配信しているコンテンツは、サービス開始当初よりもかなり増えました。現在は、事典・辞書以外にも、書籍や歴史的資料など、50を超えるコンテンツを扱っています。

こちらの資料が主要なジャパンナレッジのコンテンツです。左側が事典や辞書、右側に叢書を集めてみました。

これらのコンテンツは、基本的には、お客様からの声を基に、研究や参考資料（レファレンス）での利用頻度が高いものを搭載してあります。

今回のテーマである、「電子読書」という観点からみると、右側の叢書類が、対象とするコンテンツに近いのではないかと思います。表示される形態は、コンテンツの種類やお客様側、つまりクライアント側の環境によって異なります。事典・辞書類はテキストベースのHTMLで、叢書類は画像ベースのHTML5フォーマット、もしくはPDFフォーマットで配信されます。

それぞれ、新編日本古典文学全集（HTML5形式）、古事類苑（PDF形式）、日本国語大辞典（HTML形式、テキスト形式）の3つの画面をキャプチャしてあります。

こちらをご覧になってもお分かりになる通り、こちらの画面はPCでキャプチャしたものです。現在、ウェブサイトのデザインは、レスポンシブ・ウェブ・デザインという、画面サイズやデバイスに応じて画面デザインが変形するものが主流になっており、ジャパンナレッジもこの手法を用いていますので、タブレット端末でも見づらいということはありません。iPad miniでキャプチャした先ほどと同じ画面もご覧いただけます。

ジャパンナレッジが、一般の読書と大きな隔りがあるとすれば、それはオンラインでないコンテンツを閲覧できないという点です。読書という観点からするとこれは大きなマイナスです。ネット環境がないところでは読むことができませんから。

それでは、次に利用の実態を見てまいりたいと思います。

法人利用の内訳はこちらの円グラフのようになっています。日本国内の大学が約半分を占め、公共図書館、高等学校、海外の研究機関、その他の順となっています。

数ベースでは、大学 343、公共図書館 122、中学・高校 67、海外 92、その他 35の合計 659機関で契約されています。この数は契約数ですが、海外では特にコンソーシアム利用が多いため、実際の利用機関数は850くらいになります。

その他に含まれるのは、博物館や研究機関のほか、一般の企業などです。一般の企業で目立って多いのは出版社、新聞社、テレビ局などマスメディアに携わる企業になります。教科書を出している出版社などはとくに利用が多くなっています。

次に海外での利用実態について見てみたいと思います。

北米での利用が圧倒的に多く 6 割近くを占めています。ほとんどは日本研究を行っている大学、研究機関の利用です。続いて欧州が 34%、アジア・オセアニアが続きます。台湾ではナショナル・コンソーシアムが 5 年前に発足し、昨年末までは、約 170 の、ほぼすべての大学と研究機関で利用することができました。現在、契約の延長のための交渉を行っている最中で、4 月以降、約 30 程度になる見込みです。一方、韓国と中国については、残念ながらそれぞれ 1 機関のみ、香港での利用はありません。

コンソーシアム利用というのは、ある特定のグループにおける共同利用です。北米や欧州では、そうした利用形態を構築することで、利用コストを引き下げています。現在、欧州で 3 つのコンソーシアム、北米で 4 つ、台湾で 1 つのコンソーシアム利用があります。

さて、電子読書というテーマからいうと、ここ 5-6 年で利用者の環境が大きく変化してきているのは周知のことと思います。実際に、私どものデータベースをご利用のお客様の環境の変化を調べてみました。

個人サービスで利用 OS のここ 5 年の変化を特定の月でみてみたのがこの表です。縦が利用 OS、横が年月を表しています。

これは想像の通りの結果が表れています。ウィンドウズ OS が 9 割近くを占めていたものが、昨年の 12 月には 76%にまで減ってきています。一方で急速に勢力を伸ばしているのが、iOS と Android です。両方足しても 2.5%弱だった 5 年前に比べ、2014 年には 11%にまで増えてきています。より細かく画面の解像度まで追いかけていくと、スマートフォンとタブレット端末のアクセス割合はほぼ拮抗しており、ちょうど半分ずつくらいになっています。折れ線グラフにするとこのような感じです。

ジャパンナレッジは学術的な利用が多いので、論文やレポートの作成時に使われるため、OS のシェアとしては Windows プラットフォームで利用されることが非常に多くなっているのが一目瞭然です。

次の表は、法人サービスの OS の割合の変化です。法人は主に大学や図書館での利用ですから、Windows での利用の割合が、個人サービスよりも、より一層、高くなっています。それでも、タブレット／スマートフォン系の OS は徐々にですが増えつつあります。

同じくグラフ化するとこのようになりますが、変化が少ないのでこれは飛ばします。

個人サービスのグラフをもう少し、細かく見てみたいと思います。こちらは直近 1 年でみたときの OS の変化です。Windows の数字は右軸、その他の OS の数字は左軸にとってあります。

先ほどの 5 年スパンの表よりも、よりタブレット／スマートフォン OS の利用の伸びが顕著に出ています。第 40 週のところで、タブレット／スマートフォン OS の利用が急減に伸びているのは、年末年始の休暇の時期です。仕事や社会との接点が少なくなると、タブレット／スマートフォン端末の利用が伸びるというのは非常に興味深い点です。

タブレット端末とスマートフォンの割合ですが、こちらは画像解像度から推測するし

かないのですが、半々くらいの割合になっていました。これはジャパンナレッジが辞書・事典のデータベースであるという意味合いが強いからだと思います。

辞書・事典として利用するときは、スマートフォンで、読書的な使い方をするときにはタブレットで、という使い分けをしているのだと考えています。

利用の実態だけをみても実際の利用の実態は想像しづらいと思いますので、最後に会員の属性をご覧ください。このデータは、2014年5月のものです。

男女比は7：3で男性が多く、平均年齢は49.8歳とかなり高めです。居住地は、東京、神奈川、埼玉、千葉の首都圏だけで58%。大阪・京都・兵庫の関西圏で15%。首都圏と関西圏だけで73%という数字になっていますから、都市圏での利用が圧倒的に多いと言えます。

また業種で見ると、教育機関（大学・大学院）が33%、4番目の教育（高校・専門学校）が8%なので、教育関係だけで41%になります。そのほかでは3番目のサービス業（出版・新聞）が8%と比較的大きい割合を占めています。

また職種別では、教員・講師と大学生・大学院生だけで45%を占めています。そのほか目立つのは作家・ジャーナリスト、編集者、校閲者などとなっています。

業種の自由業、および職種の無職となっている層は、比較的高学歴な定年退職者で、退職後の余暇を研究・勉強で過ごしているのだと思われます。

さて、もっと細かいところまでみていきたいのですが、時間も限られていますので、まとめに入りたいと思います。

我々のデータベースの利用状況から、日本での学術資料のおおよその使い方は類推されると思います。それは次のような感じにまとめられます。

・法人サービスでは、Windowsプラットフォーム上で利用される割合が非常に高い。

学術の現場では、「読書」よりも研究・学習目的の論文／レポート「執筆」、目的の利用が多いためであるという点がひとつ、もうひとつは機関利用における端末選択の自由度の低さが原因だと考えられます。

・一方で、個人サービスでは、タブレット／スマートフォンでの利用がここ1年で飛躍的に伸びています。法人サービスと違い、端末選択の自由度の高い環境下では、学術資料であっても、日常的に利用するタブレット／スマートフォンでの利用需要は高く、今後はPC利用を凌駕する可能性もあると考えます。

⇒法人サービスでは、成員が日常的に利用している端末による接続が低く、機関が設置しているデバイスからの利用にとどまっています。

ここにひとつ興味深いデータがあります。どのデバイスがどのような機能を利用しているのかを分析したデータです。これによると、利用するデバイスによって、利用者の

機能／コンテンツ利用行動に大きな違いが認められました。

Windowsをはじめとする PC からの利用では、検索ページを利用する割合が 20% を超えているのに対し、タブレット／スマートフォン端末では、それぞれ 5.4%、11.0% にとどまっています。つまり、タブレット／スマートフォン端末では、検索よりも、読み物ページを閲覧する傾向が PC よりも 2 倍近く高いのです。利用される時間帯まで精査したわけではないので、確かなことはまだ言えませんが、このデータは、デバイスの特性が、読者の利用行動を制限したり、反対に新しい使い方を刺激していくことを示唆していると思います。

また、読者は、電子化が進んでいくにつれ、より多様な「読書」形態を指向していきます。制作者が意図した直線的な時間軸の流れで読書を行うのではなく、テレビの Zapping のように、ページを次から次にめくって、拾い読みするような行動も、我々のデータベースの記録からは読み取れます。

こうしたことを考えると、我々も単に紙の資産を電子化・アーカイブ化していただくのではなく、デバイスの特性による新しい読書の可能性や、読者の多様な読み方に合致する機能の開発、まったく新しい読書体験を生み出さなくてはならないのだなど、強く感じています。

以上で私の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

**田中政司**（たなか・まさし）

1967年生まれ。株式会社ネットアドバンス ビジネスセンターゼネラルマネージャー としてデータベース「ジャパンナレッジ」の営業・マーケティング全般を担当。日本版「WIRED」や「WEDGE」などの雑誌・書籍の編集を経て、2001年に同社入社。データベースの制作に携わった後、2007年より現職。現在は特にジャパンナレッジの海外での普及に力を注いでいる。